

高齢男性の家事実践とライフコース  
—仙台市におけるインタビュー調査より—

○藤田 嘉代子（宮城学院女子大学）

1. 背景と研究目的

現代日本においては、家事の実践に関するジェンダーの偏りはきわめて常識的な知識となっている。男性や父親、息子がケアにかかわらなかつたり、かかわる時間が短かつたりするという事実、そしてそれがケアの主たる担い手である女性や母親の負担を重くしている、といったように。しかしながら、家事はそのように、家庭内、夫婦、親子間の〈家事分担〉という観点からのみ論じられるだけでよいのだろうか。

男性が家事にあまりかかわらないということは、単に夫婦間の偏った分担であつたり、子どもに対するケアの不実践という問題だけではなく、彼自身の生活環境についても大きな影響があることも知られるようになった。自らのケアを十分行わないことによって、特に中高年齢層の男性で成人病が増加したり、セルフ・ネグレクト、孤独死という現象が出現したりしている。これらの背景にあるのは、男性が衣食住に十分関心を払わず、自分自身をケアする力を十分に身につけていないということである。本研究においてはこのような問題意識に基づき、男性の家事スキルの生成について、ライフコースと家事のかかわりについて探索的研究を行う。

2. 方法

2019年11月～2020年の2月に仙台市内のA地区で行った。調査協力者は10名。インタビュー協力については、A地区自治会役員に仲介してもらった。調査項目は、本人および同居の家族についての基本属性、普段行っている家事、家事を行うに至ったきっかけ、また有職時の職場環境、家事および子育て、生育環境、手伝いの経験、現在と有職時の一日のスケジュールなど。非構造化されたインタビューとして、調査項目として挙げた内容以外にも自由に語ってもらい、音声データを文字に書き起こした。

3. 結果の概要

インタビューに協力した男性たちは一人を除いて現役時代はサラリーマンであり、家庭では妻が主婦として家事子育て全般を担うという性別役割分業が当たり前の世代であつた。しかし、現在はその多くが相当の家事量をこなしており、子ども世帯の孫の送迎を手伝っているケースも見られある程度の積極性が見られた。家事をするようになったきっかけは退職を経て時間的に余裕ができたことを基本とし、食べることへの興味から自ら調理するようになったケースや、妻の発病、子どもの生活変化による自らのライフスタイルの変化によるもの等が見られた。

多くのケースに共通しているのは、子ども時代に相当な強度の手伝いをしている点である。調査協力者たちの出身は、農村や山間地である場合も多く、彼らが子どもの頃に行った手伝いは、家業であつた農作業の日常的な手伝いや燃料として松葉を拾う、また現在のようなインフラや家電機器を前提としない炊事の手伝いであり、現在の子どもたちが行う身の回りの小さな家事についての手伝いとはその強度において大きな差がある。また、そのライフスタイルという面でも上の世代とはかけ離れており、サラリーマンとしてあるいは子育て現役の父親としてほぼ妻任せだつた点で、家事の遂行については断絶が見られるにもかかわらず、高齢期にいわば復活する形で生活にかかわるさまざまな家事を自ら取り組むケースが多く見られた。

本発表においてはこのような高齢男性の家事の実践について、ライフコースとのかかわりから捉え、特に〈記憶された家事スキル〉として論じてみたい。

（キーワード：高齢男性、家事スキル、ライフコース）